

油屋熊八翁を偲び

## 毎年、宇和島へ墓参

編集部

風雨がやんで、日本経済にどうやら薄日が差し始めたかに見える。バブル期の昂揚と、その後の失意。半世紀前には歴史的現実の「敗戦」、そして戦後の復興があった。

幾度もの荒波の中で、私たちの故郷・泉都別府にどんなことが起き、何がどう変ったのか――

湯の町の旅館・ホテル経営者たちは耳目を疑った。新装なって再開した老舗「亀の井ホテル」の夕暮れ時のフロント、そこには数人の若い女性のグループから四、五十人の団体、それに一般客でこった返している……。

その運営方式ときたら、戦前以来の湯の町の常識とまるで逆である。客が着いても出迎えない。荷物も運ばない。食事部屋出しはせず、畳の宴会場も無い。だから仲居も居ない。部屋はシングルが基本、サービス料も徴収しない、とか。同ホテルの大株主はレストラン・チェーン「ジョイフル」

(本社大分市、西日本を中心に五七〇余店のファミリー・レストラン経営)で、徹底的な低コスト戦略を打ち出して数年前に出店した。「一時は沸かし湯にする案も出たのですよ」という大浴場だけが、かろうじて戦前の湯の町の面影をとどめている……。

このホテルの創業者は、言わずと知れた別府温泉発展の父、恩人と慕われる油屋熊八翁その人である。

翁が今日生きていたら、この経営振りを見て嘆き悲しむのではあるまいか。それとも、時代を先取りしたとして拍手喝采をおくるであろうか。翁の墓前で静かに頭を垂れて聞いてみたいものだ。

※ ※ ※ ※ ※

### “油屋將軍”の異名をとる

アメリカから帰国し、しばらく大阪で暮らした後、別府へやって来た油屋翁は四九歳。すでに頭が禿げあがり、丸っこい顔に短身(五尺二寸、一五七センチぐらい)、体重七〇キロのずんぐりした身ながら、全身に才気煥発(かんぱつ)さと人情味の豊かさが漂っていた。この翁の過去には、途方もないスケールの大きな物語が秘められていた。まずは、翁のプロフィール(横顔)から見ていくことにしたい(来歴を証する原典はほとんど遺されていない)。

文久三年（一八六三）七月十六日、愛媛県宇和島村横新（現宇和島市横新町）で父正輔、母トモの間に長男として生まれた。家業は米問屋、江戸時代は油問屋を営んでいたことから、その「油屋」を明治になって姓にした、という。

若い頃から評判の働き者であった。二六歳の青年になり、伊豫宇和島藩（伊達分家、十万石）のお側用人（戸田義成）の娘ユキを娶った。翌二七歳、町村制施行（明治二二年四月）時の町会議員となる。だが熊八にとって、四国辺境の天地はあまりに狭く、三〇歳で勇躍、大阪（堂島）に出て米相場師となる。

この業界の常として、一夜にして巨万の富（当時の金で六十万円ほど、現在の何億円か）を握ったこともあり、全国に「油屋將軍」の名が響き渡った。「今に見ておれ！俺だつて三井・三菱のようになったるぜ」と意気軒昂。だが満月はいつかは欠け、驕る平家は久しからず……。日清戦争後の株の大暴落で、彼は「無一文」となり、再起を期して新天地、アメリカへ単身向かう。

アメリカでの経歴は必ずしも定かでない。ホテルに住みこみ皿洗いから、牧場の手伝いなど。北はカナダ、南はメキシコまで流浪の旅を重ねながら、何でも手当たり次第やったようだ。日本にない何かを探し、何かを身に付けようとして――。

だが、クリスチャン（新教）への洗礼が彼の人生観を大きく変える。その契機を資料（伝説・小説）から探ってみることにしたい。

――明治三三年（一九〇〇）三月春、サンフランシスコ郊外でのこと。空腹と疲労で行き倒れ、大岩の影で寝込んでしまった。何時間ぐらい眠ったのだろうか。「あなた……あなた……日本の方ではありませんか」。夢うつつの中で、熊八は目をパチッと開いた。「久しぶりの日本語だ。やはり母国の言葉はなつかしい……」。声をかけたのは、三谷という名の日系人の牧師。周囲を見れば岩には大きな十字が彫りこまれ、奥の森の中には教会が建っていた。

この教会で暫く静養する。どうやら元気になると、牧師は静かに説教するのであった。

「われらの主、イエス・キリストは、我々地上に生きる人間をひとしく旅人として遇し……また、この旅人をねんごろにもてなせとも諭されました。……飢えている人には食物を、渴している人には飲物を、裸の人には衣服を、病める人には薬を……、左の頬を打たれば右の頬を差し出しなさい……」

ここでエジプト（イスラエル）をめぐる人類の古代史を回顧してみることにしよう。

今から、ざっと三千数百年の昔（紀元前一四世紀頃）、イス

ラエル民族の祖ヤコブとその後裔二二の部族（古代ユダヤ人）は、指導者モーセに率いられ苦難のエジプトを脱出し、新天地を探す途中、シナイ山の地でヤハウェ神から授かったと伝えられるのが「モーセ十戒」である。それは人倫の基本に反する殺人、姦淫、窃盗、貧欲などを厳禁し、併せて信仰（宗教規範）として「我は汝らの神、唯一つにして全能なり。我以外の如何なる神も信ずべからず」（旧約聖書「脱エジプト記」）と啓示し、ここに不寛容の絶対神を宣告したのであった。

このモーセの戒律を基礎に、イスラエルの苦役の同胞のために樂園「神の国」を地上にもたらすとするメシア（救世主）の来臨を信じて疑わないのが、古代ユダヤ民俗の原信仰、即ち「ユダヤ教」の起源であった。だが、荒野に拓いたヘブライ王国も千年の間に南北に分列して亡び、バビロンの地（現イラク中部）に捕囚として強制移住させられ、のち再び「神の国」をもとめて世界各地に流浪の旅を始めたのである。

キリスト教の開祖イエスが人類の歴史に登場するのは、この直後であった。

北パレスチナ（ナザレの地）で大工ヨセフとその妻マリア（聖母）との間に生れ、三十歳頃家を出てヨルダン川でヨハネから洗礼を受け、神の国の来臨の近いことを告げられてユダヤ民族の悔改を迫った。神は慈悲深い父で、人間は皆同胞として相愛すべきことを説き、一切の偽善を拜し、正義と愛

との徹底を期した。「汝の敵（異教徒）を愛し、迫害する者のために祈れ！」と喝破して寛容の精神を説く（「新約聖書」全二七卷マタイ伝）。

このように聖地エルサレムは、もとユダヤ教とキリスト教の発祥の地であった。ところが六世紀になって（六一〇～六三〇年頃）、当地でマホメット（アラビアのメッカで生れる）が創めたイスラム教がアラビア民族を主に信仰されるようになつて聖地となつた。爾来、それぞれ宗教と民族を異にする三者が三つ巴となつて三千年の紛争と戦争の歴史をひきずり、二一世紀の今日まで争い続けていることはご承知のとおりである。

※ ※ ※ ※ ※

脇道にそれたので課題を急ごう。

三谷牧師は、熊八に向い「あなた、日本に帰りなさい。奥さんと子供、友人の処に……」。こうして帰国の手続きをしてくれ、そつと乗船券を握らせたのである。熊八は、一刻も肌身から離さなかつたという百ドル紙幣を取り出して言った。「牧師さん、私にこの金はもう不要です。どうか私のように困っている人に差し上げてください。たいへん、お世話になりました」。

熊八が乗船したオリエンタル号がシスコの沖合に出たとき

「さようなら、アメリカ。私の心にすばらしい種を播いてくれた自由と平和の国、アメリカよ。もう一度必ず帰ってくるよ……」

と心の中で叫びながら、どこまでも広く、どこまでも紺碧の空に訣別を告げた。土産品は何一つ持たなかった。しかし、彼の心は満たされていた。心身にどっしりするほどの大きな収穫が詰められていた。そして、もう一度、天に向って強く叫んだのであった。

「神は今に至るも働き給う 我もまた働くなり」

※ ※ ※ ※ ※

明治三〇年から三年間、アメリカに滞在して帰国した油屋は、その後どのようにして暮したのであろうか。取りあえず妻ユキと娘ヨシ子は別府に帰し、自らは暫く身の振り方を考えることにした。

熊八は、当時アジアの新興国、日本の歴史の進展をよみ取る眼力においても狂いはなかった。日清戦争後、中国大陸とりわけ旧満州での日露の覇権争いで戦争になることを予感した。その時こそ好機到来、夢の実現をと捲土重来を期したのである。幼少期、海に生れ育った彼には、波頭逆まく株の世界でしか泳ぐ術を持たなかったのであろうか。

世に「三つ児の魂百まで」とか「雀百まで踊り忘れず」と

の諺がある。彼は再び大阪堂島の町を彷徨しはじめた。前回の失敗に懲りて、仕手は万事消極的、慎重な上にも慎重に運び「手仕舞い」にかかった。ところが、これが裏目に出た。処分した株が悉く高騰し、慌てて反転して買い戻しにかかったが後の祭り……。運命はあまりにも皮肉、仕手神に見離された。明治三九〇年の大暴落に遭遇したのである。

傷心の身をひきずり、彼は妻子の住む別府の町に現われる。敷居はあまりにも高かったが、妻子は暖かく迎えてくれた。賢明なユキは渡米時に渡されていた三百円の半分で、古家を買っていた。これを湯治宿に改築した。家号も第二夫人の亀井アイの姓をとり「亀の井旅館」としたといわれる。

明治四四年、流川六丁目裏地の田圃の中に改築した一軒家は、一階八畳が一間、二階は六畳二間であったという。温泉には全く不自由しなかったが、困ったのは日常必需の生活用水。井戸を掘れば出てくるのは熱湯ばかり。温泉を冷やして使った、とか。

大正六年（一九一七）、待望の上水道が敷設されたのを機会に、旅館を近代風の洋式に切り換えた。経営モットーは、言わずと知れた聖句の、あの「旅人をねんごろに迎えよ」である。

新聞とラジオの普及で、世はまさに宣伝時代。同十四年には「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」の標柱を富士山頂に

立てたのは有名な話。爾来、奇抜なアイディアや企画を次々に打ち出し、観光温泉地「別府」の名をいやが上にも高めたのである。その項目のみ掲げよう。

流川通り延長・拡幅 別府宣伝協会の設立 ゴルフ場の誘致 日曜学校の設立 宝塚少女歌劇団の誘致 花火大会 大阪商船との協同宣伝活動（桟橋待合室など） 奥別府（由布院温泉・九重高原など）の紹介 鶴見園・ケーブル遊園地の誘致など、など

名物「地獄めぐり」の開始は、その代表的なものであった。小型バスが珍しい頃、四台を購入してガイド付きの遊覧事業をおこす。

「三食付で月給は二十円。うどん一杯が五銭の時代でした。当時、かなりの高給取りだったんですよ。女性に職場が限られていたのでね……」

当時のガイド嬢で唯一人の生存者、村上アヤメさん（現在九三歳）の話。今でも七五調の、あの名調子が忘れられない。

ここは名高い流川 情けの熱い湯の町を 真すぐに通る大通り 旅館・商店立ち並び 夜は不夜城でございませす（ブーブー）

ちなみに、当時の少女車掌の服装といえおしゃれなパンツ・ルックにTシャツ姿。特注のスカートにジャケット、革の帽子という超モダンなものであった。当時の若い娘たちの

憧れの的であった。戦後のそれが空を飛ぶスチュワーデスのように、である。

油屋翁の周辺には常時、サポーターともいふべき同志三人がいて翁の諸事業を陰に陽に助けた。シテ役はもちろん熊八、ワキ役はいち早く宇都宮則綱（のりつな）、次いで梅田凡平（ほんぺい）、さらに山下彬麿（あきまろ）の三人である。資料により、それぞれの横顔を見ていこう（大分合同新聞社『大分県歴史人物事典』平成八年刊）。

### 宇都宮 則 綱（明治三年～昭和四九年）

衆議院議員、鬼山ホテルの創業者。速見郡八坂村（現杵築市）の酒造家に生まれた。県立農学校（当時、別府石垣村に所在。明治三八年八月創立）卒業、朝日村で兄が経営する酒屋を引き継ぐ。当時、あまり注目されていなかった「地獄」に着目し、ワニの養殖を手掛けて珍しがられる。また、別府絞りの店を出したり、東京でフグ店や雑誌社を営むなど話題には事欠かない。

油屋を主に梅田凡平らと「別府宣伝協会」を設立し、全国に別府を売り出す。大正一三年（一九二四）別府市議員に当選し議長にもなり、昭和一八年全国市会議長会長にも就任。この間、同一〇年から県会議員を一期勤める。戦後の昭和二二年、第二回衆院選に民主党から出て当選。しかし、二年後に落選したのを機会に政界から退き、鬼山ホ

テル経営に専念した。

## 梅田 凡平 (明治二四年、昭和四年)

京都府出身。病弱のため、大正七年別府に移住した梅田は、油屋の知遇を得て宇都宮らと別府宣伝に努めた。熊八らと富士山頂に標識を立てた話は有名。

この頃、モーニングを着てカスターネット(スペイン系の打楽器)を鳴らし、別府棧橋で湯治客を歓迎する姿に人氣が集まる。敬虔なクリスマスチャンで「別府お伽俱樂部」を結成し、北浜の協会で「日曜学校」や、また「第一回県子供大会」を開催したりした。

つづいて、瀬戸内海沿岸の一つ一つの町に呼びかけ、大阪商船の旅客船を借り切り、子供らに船旅を楽しませた。年末のクリスマスには自ら「サンタ」に扮して小型の複葉水上機に乗り込み、別府の上空を一周して着水。鶴水園広場に待つ多くの子らにプレゼントを配ってまわり、「別府のニコニコおじさん」と親しまれた。病弱のため、油屋翁より早く逝去した(昭和四年四月一日、享年三九歳)。

## 山下 彬 磨 (明治十八年、昭和三十年)

弁護士、作詞家。宇佐郡出身。旧制中津中学校から一高・東大法科卒。福岡で開業するが、家族が病弱のため、大正末期に別府市田の湯に移住。文芸の才にも恵まれ、余技に自作の民謡を唄うのが自慢。昭和初期、油屋と昵懇にな

り、再三、久住に遊んで「豊後追分」(別名、九重高原の歌)を作詞する。自信を得て、泉都別府を民謡で売り出そうとして作ったのが「瀬戸の島々」――

瀬戸の島々波々越えて 豊後別府へはるばると

豊後別府は東洋のナポリ 今じゃ世界の湯の都

自費で別府検査の「富江さん」を連れて上京し、ピクター・レコードで録音して売り出す。また、朝鮮・満州まで民謡の旅をしながら、別府宣伝に努めた。

一方、「別府文化協会」を設立して県内外の文化人を集め、亀の井ホテルの喫茶サロンで文芸の話題に花を咲かせた(この当時、出入りしていた由布院温泉の旅館業者ら論客が、戦後いち早く「町おこし運動」に立ち上がったといわれる)。翁が黄泉の国へと旅立った翌昭和一一

年、軍靴の音が響き始めると戦時下を達観したのか、泉都から千年の文化と歴史の町京都に移住。軍歌が歌われ始めるや「民謡こそが日本精神の発露」と説き、文部省に頼まれて



別府温泉宣伝協会のめんめんは、なんと、富士登山をして広告の標柱を立てた。『山は富士、海は瀬戸内、湯は別府』(『BAHAN』第8号より)

「国民歌謡の在り方」を講義したことも。昭和三〇年、京都簡易裁判所で弁論中に倒れた。

## 晩年は「別府一の借金王」になる

昭和六年（一九三一）、全国大掌大会おおてを開く。この頃まで、どうかホテル・バス遊覧事業も好調だった。以降、苦難の幕明けである。

経営が苦しくなると、給料が支払えない。翁は涙を流して詫わび、現金の代わりに株券を配ったことも。しかし、「油屋さんという人は仏様のような人で、悪気は一つもない。みんな油屋さんのためなら、給料をもらわなくても働こう」と言った、と伝えられる。

別府の観光事業のためなら、何十年先を見通して借金まですして尽力し、自分の利益など全く考えなかった。翁自らは「別府一の借金王」と称して、なんら恥じるころは無かつたようだ。

油屋翁の最後——人生の終着駅である「死」のドラマが展開するのは、日中戦争（一九三七年七月七日北支事変）が始まろうとする昭和一〇年三月のことである。

同月二四日午後、流川通りの鶴の井ホテルに宿泊中の旧友を訪ねた折、脳溢血で倒れて数日間、意識不明となる。同

二七日、旧曆二三日の小潮が引き終わる早朝、午前五時過ぎのこと——

「お父さん……、お父さん。何の夢を見ているの……。しつかりしてよ……」

ユキ夫人や身内に看守られていた。翁がこの時、最後に遺したものはただ一言「グワツ！」という大きな叫び声であつたという。それはまさしく、禪門の導師どうしが死者に最後の決意を宣告する引導いんどうの「喝かつ！」（「転迷開悟」の仏語とされる）を自分自身に言い聞かせるかのような厳しい「鶴の一声」であつたのかもしれない。人の死するや「その言よし」という。いかにも、翁らしい死にざまと言わねばなるまい。

宿泊客に文人墨客ぼくさくや俳人が多かつたことからか、晩年には俳句をたしなんでいたようだ。翁の辞世の句とされるのは、次の一句であつた。

俺もまた かぐや姫かや 春の月

この句は俳聖、松尾芭蕉（一六四四—一九四）の「旅に病んで 夢は枯野を かけめぐる」に比すべくもないが、翁がおのれ自身の姿を「かぐや姫」に擬なぞえて、人生劇場の晴れ舞台でドラマの主人公を演じてきたと実感したのであれば、それはそれで俳諧の道に通じるものがあるのではあるまいか。博學で人格も高潔な翁の、面目躍如たる一面を垣間見る思いがするのである。

周知のように「かぐや姫物語」は、平安の初期に作られた最古の物語とされる（作者不詳）。その内容は、竹取の翁が青竹の中から得て育て上げたのが絶世の美女「かぐや姫」。五人の貴公子の熱烈な求愛にも難問を出して退け、また時の帝のお召にも応ぜず、遂に八月十五日の満月の夜に月に帰ってゆくという空想物語である。二一世紀の今日、三万四千キロの彼方にある月面に人間が宇宙船に乗って着陸（米アポロ11号、昭和四四—一九六九年七月二〇日）するといった科学万能の世の中、このような夢物語を信じる、かつてのような文学好きの少年・少女は少なくなつたのではあるまいか。

翁の最後を飾る「葬儀」もまた、彼の生涯にふさわしく豪勢、だが清楚なものであつた。桜花爛漫の昭和一〇年四月六日午後二時、別府市公会堂（現市中央公民館）でキリスト教式により執り行なわれた。

葬儀委員長は宇都宮則綱。県下の知名士で満堂のなか、まず聖歌合唱・聖書朗読・祈祷とすすみ、友人代表で委員の山下彬磨が来歴を読み上げ、委員長の宇都宮則綱が甲電披露。外国からの一〇八通を含んで全部で千五百余通を「声をからして機関銃のような勢いで読み上げた」。

参列者の間で語り継がれた挿話として、出棺の折に山下弁護士が自らタクトを振り指揮したという民謡「豊後追分」が

愛好者の間で唄われ、最後の訣れを惜しんだといわれる（享年七三歳）。

九重大船 朝日に映えて

駒はいななく 草千里く

前に高崎 後に鶴見

由布は見えぬか 湯のけむりく

久住高原 すすきに暮れて

阿蘇の頂き 雲沈むく

翁のかつてのプレーヤー（演技者）たちも、そのほとんどがすでに鬼籍に入っている。油屋熊八翁を隊長とする別府觀光の先覚者（爆弾）三勇士、ならぬ「油屋隊四勇士」の面々は、天国にあつて何を感じ、現世の世相をどう批判し、翁につづく別府再興の「町おこし」若者部隊の奮闘振りをどう評価しているのだろうか。

散る桜 残る桜も 散る桜

第二次大戦で二十歳そこそこの特攻隊が何百人となく、次々に戦死していった。「詠（み）人知らず」のこの句は、戦前にあつても「松島や あゝ松島や 松島や」と同様に人口に膾炙していた。翁もまた参列者に、別府発展のために「俺につづけ！」とばかり散つていたのであろうか。黄泉の国の桜花の下で、四勇士は楽しく語りあつてゐることであろう。



畑迫沙奈恵さん

「油屋翁の墓参ツアーは、全くヒヨんな事から始まったんですよ」（ヒヨンの語源はポルトガル語―「広辞苑」）

今（平成15年）からざっと一三年ほど前、別府市内の不動産会社に勤めていた大沢（旧姓畑迫）沙奈恵さんは、仕事との関連から別府観光の低迷振りをひしひしと感じていた。何とか、せねばと……

彼女は生来、読書が大好き。朝は新聞に始まり、夜は寝る間も惜しんで読書した。食物が生命の源泉なら、読書は知識欲を満たす栄養剤のようなものと考え、あらゆる本を手にした。戦前のナチス・ドイツにも関心を抱き、ヒットラーに関する著作を手当たり次第に読破もした、という。

一番関心を懐いた人物がジョセフ・ゲッベルス（一九三七～一九四五）。ヒットラー宰相の片腕といわれ、一九三三年以降「宣伝相」を勤めた。ベルリン陥落の直前、地下壕でヒットラーに殉じて家族もろとも自殺した。「宣伝メディアのパイオニア（先駆者）」と称された彼が、友人に当てた手紙の一節が妙に忘れられない。

「自分が生まれた町の歴史、文化を知る事が社会参加の第一歩。それを知らない者は、つまらぬ人生を送るであろう」

瞬間、私（大沢さん）はハッとした。何故なら、生まれ故郷の別府の町を考えたこともなく、全く興味を抱かなかつたから。その時、偶然わが家にあつた子供向きの『大分の先人たち』の本で、別府を世界一の温泉都市に育て上げた油屋熊八翁の存在を知つたのである。これが故人の翁との最初の出会いであつた（オムニバス・エッセイ「されど、われらが……」第27号より）。

「是非とも、油屋翁のお墓に掌を合わせたい。再び別府を盛り上げるチャンスにでもなれば―」

と、縁のある人たちに聴いてみたが、一向に手懸かりがつかめない。フツと思ひ付いたのは、翁の出身地、宇和島市観光協会に連絡してみることであつた。その結果、同協会の協力で市内の「光国寺」にお墓があると判つた。その場で宇和島へ走つた大沢さんは、墓前に立つて啞然とした。墓石には苔が生え、雑草が生い茂っている仕末。「これが、かつての油屋翁の墓か」と目を疑つた、という。早速、光国寺の住職・今野禅海師に聞いてみた。

「亡くなつて五十年以上になるとはいえ、これまで別府

から誰一人として墓参りに来ない。これは一体、どうした  
ことか……」

翌平成四年、別府郷土史クラブ（約三〇名）の事務局を  
していた実家の母、平松つゆ子さんに相談して結成したのが  
〈油屋熊八翁を偲ぶ会〉であった。こうして墓参ツアーが実  
現したという次第である。

毎年五月、翁を偲ぶバス旅行（日帰り、又は一泊）には、  
さまざまな人が複雑な想いを抱いて参加する。

昨年（平成一四年五月）のツアーのこと。八幡浜へのフェ  
リーの中で「本当に久し振りに油屋社長さんに会える」と声  
を弾ませているのは村上アヤメさん。これまでの参加者の中  
で唯一人、生前の翁と言葉を交わしたことがあるという。往  
年のバスガイド嬢も、当年とつて九十三歳。これまでもガイ  
ドの実演に、またお座敷や集會に招かれたこともあった、と  
か。

「祖先を敬うのと同じ気持ちで参加している」と話すのは、  
元亀の井ホテルの支配人（総務部長）の手島誠一さん。「油  
屋翁の靈前に謝意を表し、併せて報恩の情を市民に一人でも  
多く浸透させたい」と語るのは、元別府商工會議所専務理事  
の末田睦人さん。

「バスに乗つたら喋らずにはいられないの」と喋るのは、  
亀の井バス現役のガイド、小野涼子さん。「今日はアンタは

お客さん。ガイドせんでもいい」と言われたが、私服のまま  
で熟練したガイド振りを披露して乗客を大いに楽しませた。  
「彼女にも、往年の油屋翁の遺志（魂）が宿っているのではよ  
う」とは、平松さん。

現地の宇和島では、市観光協会の職員が出迎え、地元のマ  
スコミ関係者が取材に殺到した。一方、参加者の中には法被  
姿で街頭に立ち、竹鈴やパンフを配布する人もいて、さすが  
に別府宣伝に余念がない。「別府市民がこうして毎年来てく  
れることで、熊八翁に対する市民（宇和島）の認識も高まり  
つつあります」と、これは宇和島市観光協会の清家事務長。  
現在では、同協会が「翁の墓守」を定期的にして下さってい  
る、という。

「今こそ熊八翁が夢に描いた温泉観光都市、別府の風光明  
媚さを想い起こし、原点に立ち返る時期が来ているので  
はないか。観光事業に携わる人たちや市民、行政が一体と  
なつて別府観光の浮揚、復興を実現させたい」  
と熱心に語るのは内田有彦会長（市議）。「十余年前から、ほ  
そぼそと続けてきたツアーだったが、地道な活動がどうやら  
実を結んだ。愛媛県でも無名に近かった油屋翁の名が全県に  
広まったのでは……」と、ツアーを企画した大沢さんの実感  
である。

「油屋翁の功績を市民や観光客に広くアピールするため  
に、翁の遺品や写真、秘話を知る人の諸資料を展示する油  
屋翁記念館（記念ホール）を、この際、是非とも建設したい」

「資金集めはたいへんだが、別府史談会や別府どんぐり  
倶楽部（ボランティア団体、柳井会長、会員約百名）、市  
老連などの諸団体、もちろん別府市や市観光協会、観光業  
者団体など広く市民の協賛を得て、私の生涯をかけて実現  
したいのです。何ぶんのご協力を……」

と熱っぽく訴えるとき、事務局長・平松つゆ子さんの瞳はま  
すます輝きを増すのである。

（後記） 別府温泉町おこしの一環として広く活躍している  
「油屋翁を偲ぶ会」（会員三百二〇名）の紹介記事を、事務局  
長の平松つゆ子さんに依頼した。数日後、当史談会で執筆し  
て欲しい旨の連絡があり、当方編集部（大野）が担当するこ  
とになった。

油屋翁の生涯については小説・伝記の類で大方は知られ  
ているが、実証的な史料は乏しく、正直なところ思案投げ首  
であった。結局、歴史的事実の大枠の中で当らず障らず、在  
り来りのものに終ってしまった。会員各位のご海容を願いた  
い。

後半の「毎年、宇和島へ墓参」の内容については、大分合

同新聞に昨年（二〇〇二年五月中旬）「油屋翁墓参ツアー同  
行記」（上・中・下）が連載されていたことから、同本社（文  
芸部）と別府支局の了承をいただいた上で、同行記に基づい  
て記述した。同新聞社のご厚情に対して深謝したい。また、  
平松局長他関係者にも迷惑のからぬよう配慮して書いた積  
りであるが不適切、間違い・誤解などあれば同寛容を切にお  
願いたい。

なお、参考（引用）資料は次のとおりである。

- ・大分合同新聞社（是永勉）『別府今昔』（昭和四一年）
- ・『別府市誌』（昭和四八年・同六十年版）
- ・大分合同新聞社『大分県歴史人物事典』
- ・村上秀夫『小説油屋熊八』（昭和五九年）
- ・岩藤みのる『甦れ！熊八たち』（一九九九年）
- ・宇都宮則綱『回顧七十年（自叙伝）』
- ・井上信幸『油屋熊八』（『大分学・大分楽』二〇〇三年）
- ・B A H A N『油屋熊八と別府』（第8号）
- ・大分県編『大分県史』（第一八巻「近代編4」）
- ・『市報べつぷ』一九九六年八月号〜一九九九年六月号
- ・藤崎英彦『別府観光振興の先駆者油屋熊八』
- ・大分合同新聞社（別府市版）朝日新聞（大分版）など
- ・村上重良『日本宗教事典』中「近世の宗教―キリスト教  
の伝来、キリシタン」講談社学術文庫

・西日本新聞社『別府歴史散歩泉都有情』

「熊八精神」はどこへ（平成五年）

・その他



持参した水で墓石を清める村上アヤメさん(右)

(『大分合同新聞社』転載)



宇和島市の光国寺本堂での法要。焼香する参加者  
(左は事務局長 平松つゆ子さん)